



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	テクノロジーのユートピアと多民族の祭典：シカゴ「進歩の一世紀」万国博覧会、 1933-34
Author(s)	土田, 映子
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 17, 13-25
Issue Date	2013-10-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53602
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	departmental bulletin paper
File Information	JIMCT_1702_tsuchida.pdf



テクノロジーのユートピアと多民族の祭典 —シカゴ「進歩の一世紀」万国博覧会、 1933-34年—

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授
土田映子

土田映子
TSUCHIDA Eiko

Technological Utopia and World's Fairs: A Century of Progress Exposition in Chicago, 1933-34

TSUCHIDA Eiko

abstract

This paper examines how the ideology of technological utopianism was represented in Chicago's Century of Progress Exposition (1933-34), and how much and in what ways the city's immigrant groups that took part in the fair were involved in the fair's predominant ideology that celebrated technological progress. At the fair, the diverse national groups competed against each other in the displays of their contributions to America and their achievements in technology. While Western nations generally had something to boast about their technological achievements, non-Western nations mostly lacked them, and instead resorted to the displays of traditional culture and exoticism. For visitors to the fair, this dichotomy may have offered a world view that divided nations into those that were deemed capable of using the power of technology in order to work toward a perfect society, and those left out from that process.

はじめに

1990年代中盤以降、急速に一般社会への普及が進んだインターネットのインパクトは、テクノロジーと社会の関係についての議論を再燃させつつある。インターネットが社会的インフラストラクチャーとして一定の完成をみた国や地域においては、それが報道や経済活動はもちろん、各種の政治活動・市民運動のネットワーク形成や私的な人間関係の構築までの人間のあらゆる活動の範疇に入り込み、時には不可避免的に条件づけを行なう存在となっていることは論を俟たないであろう。こうした高度なテクノロジーが人間の諸活動に介在することによって、人々の思考や行動の様式、世界観そのものが規定され、そのテクノロジー以前のあり方からは変容させられていくのではないかという観測が今日、インターネットのみに留まらないさまざまな技術革新の影響への学術的関心を呼び起こしていると考えられる。2006年にASA (American Studies Association) が学会誌『アメリカン・クォーターリー』の特別編集号として、「アメリカン・スタディーズにおけるテクノロジーの位置」と題した巻を発行したのはその一つの現れといえる。この巻においては、電話や電車といった既に長くわたしたちの生活の風景を形作ってきた技術から、より近年になって視野に入ってきたGPS (global positioning system) 等に至るまで、幅広いテクノロジーの産物と南北アメリカの社会・文化との関係が取り上げられた¹。

この特別編集号が示すもう一つの新しい流れは、白人・男性・中流階層が支配権を握ってきたテクノロジーの創出と利用の歴史から焦点をずらし、そうした覇権的立場とは異なる位置にいる人々とテクノロジーとの関係に光を当てようとする研究の台頭である。レイヴォン・フーシェはアフリカ系アメリカ人をテクノロジーによってコントロールされる客体としてではなく、アメリカ文化における自らの立ち位置からテクノロジーに主体的に関わる存在として捉え直すことを提唱し²、ジュリア・スゼは人工ホルモンによる健康被害の問題をジェンダーの視点から論じた³。このような、より多面的にテクノロジーとアメリカ社会との関係を分析していく研究が今後は増えていくことが期待される。

テクノロジーとアメリカ社会との関係を論じる研究は、1980年代に一つの隆盛期を経験している。本格的なコンピューター時代が到来したと考えられたこの時代に、アメリカの社会・文化とテクノロジーが互いにどのように規定し合ってきたのか、またアメリカの歴史上、技術の発達がどのような役割を果たしてきたのかという問題意識が、いくつかの重要な研究成果を生み出した。その代表ともいえるトーマス・P・ヒューズの大作『アメリカン・ジェネシス：発明とテクノロジーへの熱狂の一世紀 1870-1970』(1989年)⁴は、副題が示すように南北戦争の終息後間もない時代から20世紀後半に至る約一世紀を観察対象としているが、ヒューズと共通する関心を元に書かれた他の歴史研究もほとんどがこの間に収まる時代を対象としている。これらの研究

- ▶1 Carolyn de la Peña and Siva Vaidhyanathan, eds., *Rewiring the "Nation": The Place of Technology in American Studies*, *American Quarterly* 58, no. 3 (September 2006).
- ▶2 Rayvon Fouché, "Say It Loud, I'm Black and I'm Proud: African Americans, American Artifactual Culture, and Black Vernacular Technological Creativity," *American Quarterly* 58, no. 3 (September 2006), 639-61.
- ▶3 Julia Sze, "Boundaries and Border Wars: DES, Technology, and Environmental Justice," *American Quarterly* 58, no. 3 (September 2006), 791-809.
- ▶4 Thomas P. Hughes, *American Genesis: A Century of Invention and Technological Enthusiasm, 1870-1970* (New York: Viking, 1989; reprint, Chicago: University of Chicago Press, 2004).

▶5 Howard P. Segal, *Technological Utopianism in American Culture*, twentieth anniversary ed. (Syracuse: Syracuse University Press, 2005; originally published by Chicago: University of Chicago Press, 1985).

▶6 Ibid., 10.

▶7 Ibid., 56.

の多くは、特に1880年頃から1930年代までの約50年間を、アメリカ人の世界観と生活様式が一大転換を遂げた時期として位置づけている点で共通している。

その一つに、ハワード・P・シーガルによる『アメリカ文化におけるテクノロジカル・ユートピアニズム』（1985年）がある⁵。シーガルはアメリカにおけるユートピアニズムの表現の中で、テクノロジーへの信奉を基礎とするものこそがアメリカ社会の展開に最も広く深い意義を持つものであると考え、主に1883年から1933年の間に活動したユートピア主義的思想家や小説家の議論を分析対象として、アメリカのユートピアニズムとテクノロジーの歴史的連関を検討した。シーガルによれば、「テクノロジカル・ユートピアニズム」という用語の使用例は1930年代から散見されるが、この概念を主題としたまとまった論考はシーガルのもの以前にはほとんどなかった。シーガルは先行文献での用語の使われ方を踏まえ、テクノロジカル・ユートピアニズムを、「テクノロジーを、理想郷をもたらし手段として誇示する思考や活動の様式」と定義した⁶。このテクノロジカル・ユートピアニズムの表現者としてシーガルが選んだ25名の著述家の作品は、同時代の社会問題をテクノロジーの発達で解決し、理想社会が実現するという未来像を説く、テクノロジーの万能視という特徴を共有していた。このような思想の源は少なくとも18世紀のヨーロッパにまで遡れるものの、テクノロジーのもたらしユートピアが実現可能なものとして論じられるような条件が整ったのは19世紀のアメリカが初めてであったとシーガルは述べている⁷。

本稿では、大恐慌下のシカゴで1933年から2シーズンにわたって開催された「進歩の一世紀」万国博覧会（A Century of Progress Exposition）を対象に、シーガルの定義によるテクノロジカル・ユートピアニズムの思想が万博でどのように表現されていたかを検討するとともに、万博に参加した多様な移民コミュニティはテクノロジカル・ユートピアニズムに代表される当時の万博の方向性とどのような距離を取っていたのかを概観する。シカゴで行なわれた万博としては1893年のコロンブス記念シカゴ万国博覧会（The World's Columbian Exposition）が有名でよく研究されており、ユートピアニズムとの関連も論じられている。一方、1933-34年のシカゴ万博はコロンブス記念博と比べると注目の度合いは低かったが、近年になって関連資料の整備や論考の出版が活発化しており、19世紀から20世紀にまたがる万博全盛期の後半部分を考察する上で重要な位置を占めるようになってきているといえる。

「進歩の一世紀」博は、企業による展示が中心となった20世紀の万博の初期における典型といえるものであった。周知のように、万国博覧会はその時代の先端技術のショーケースとして、民衆教育の場として、さらにはその時代に構想される未来社会像を提示する場として機能してきた。「進歩の一世紀」博も、1930年代のアメリカにおいて志向されていた未来像の反映であるだけでなく、そうした未来像を来場者に向けて構築・提案する場でもあった。また、「万国」の博覧会という側面からいえば、19世紀以来の万博はそれぞれの時代に支配的な人種・民族・世界観が表象される場であり、そこに現れた階層的かつ差別的な人種・民族観についてはこれまでに批判的検証が行なわ

れてきている。しかし、「未来」や「ユートピア」のイメージを提示する場としての万博と、「万国」の人々から成る世界の縮図を提供する場としての万博という二つの側面の関連性については、アメリカの万博に参加した他の国々の展示・企画やそれに協力した合衆国内の移民コミュニティの活動と同様、あまり注目されてこなかったといえよう。本稿ではこれらの点について今後検討されるべき方向性を考えてみたい。

1 | 二つのシカゴ万国博覧会とユートピアニズム

ユートピアニズムをキーワードとして「進歩の一世紀」博を考察するにあたり、その40年前にシカゴで行なわれたコロンブス記念万国博覧会との断絶と連続性を、先行研究に即して振り返ってみよう。万国博覧会を扱った幾多の学術的著作の中でも、コロンブスのアメリカ到達400周年を記念した第一回のシカゴ万博を取り上げたものは一つの顕著なグループを形成している。その中でユートピアニズムを主要な枠組みとして採用しているものとしては、ジェームズ・ギルバートの『パーフェクト・シティーズ：1893年のシカゴのユートピア』（1991年）がある。ギルバートはコロンブス記念博を、勃興するアメリカ中産階級によって構想された理想のアメリカ都市像が投影された場所として捉え、上流文化・大衆文化・商業文化といった都市のすべての要素が均衡して共存するよう計画されたものと解釈した⁸。その計画を支えたユートピア思想の根本にあるのは、「大覚醒」以来の福音主義と千年王国信仰であるとギルバートは論じている⁹。また大井浩二は主に文学者やジャーナリストの視点から書かれたコロンビア記念博のイメージについて検討する中で、エドワード・ベラミーのユートピア小説『かえりみれば―2000年より1887年』（1888年）¹⁰に描かれている西暦2000年の未来社会は「十八世紀的な理想の共和国が二十世紀的なテクノロジーと産業主義によって」実現された「テクノロジカル・ユートピア」であるとし、そのユートピア像と同じ「青写真に基づいて構築されたのが、シカゴ万国博覧会の『ホワイト・シティ』」であると論じている¹¹。しかし、大井が検討した事例が示す当時の万博来場者の「ホワイト・シティ」への印象は、「エデン」「パラダイス（天国）」「新しいエルサレム」「神々の庭園」といった言葉で表現される宗教的枠組みの中でのユートピアとしての性格が前面に出ており、そうしたユートピアを実現する力としてのテクノロジーは、含意されているにしても比較的目立たない地位にとどまる¹²。このことはギルバートの取り上げた万博企画者側の思想が来場者側の期待と共鳴していたことを示しているが、ギルバートは、異なる都市的要素の均衡という企画者の意図を裏切る形でコロンビア記念博は商業化と娯楽化の方向へ強く傾斜していったと結論づけている¹³。

一方、「進歩の一世紀」博とユートピア思想の関連については、アメリカにおけるテクノロジーと未来像をテーマとしたアンソロジーの中でフォルケ・

▶8 James Gilbert, *Perfect Cities: Chicago's Utopias of 1893* (Chicago: University of Chicago Press, 1991), 83.

▶9 Ibid., 40-42.

▶10 Edward Bellamy, *Looking Backward: 2000-1887* (Boston: Ticknor, 1888; Cambridge: Harvard University Press, 1967; New York: Penguin Books, 1982).

▶11 大井浩二『ホワイト・シティの幻影―シカゴ万国博覧会とアメリカ的想像力―』（東京：研究社出版、1993年）、61-64頁。

▶12 Ibid., 57, 69-71, 76-78, 175-76.

▶13 Gilbert, *Perfect Cities*, 128.

▶ 14 Folke T. Kihlstedt, "Utopia Realized: The World's Fairs of the 1930s," in *Imagining Tomorrow: History, Technology, and the American Future*, ed. Joseph J. Corn (Cambridge: MIT Press, 1986), 99.

▶ 15 Ibid., 97-98.

▶ 16 Robert W. Rydell, *World of Fairs: The Century-of-Progress Expositions* (Chicago: University of Chicago Press, 1993), 9.

▶ 17 Ibid., 7.

▶ 18 Ibid., 99.

▶ 19 Ibid., 106

▶ 20 Ibid., 214.

T・キールステットが触れている。1933年のシカゴ万博と1939年のニューヨーク万博を考察対象としたキールステットは、ユートピアのイメージはそれ以前の万博にも投影されていたが、科学・技術がユートピアを実現するという考えがより現実味を帯びたものとなったことが1930年代の特徴であるとする¹⁴。キールステットによれば、技術の発展やインダストリアル・デザイナーの台頭に加え、思想的には同時代の技術主義社会論の高まりに伴った技術者信奉やH・G・ウェルズによる未来社会イメージが、テクノロジーのユートピアというイメージの形成を準備した¹⁵。

1993年になって、アメリカ帝国主義と万博との関係を論じた研究で知られるロバート・W・ライデルが「進歩の一世紀」博を主要テーマの一つとした論考を発表した。1930年代から50年代に大西洋の両岸で行なわれた万博を研究対象としたこの本でライデルは、これらの万博の意義は国家の社会経済システムに対する民衆の信頼を回復し、既存の権力層を温存して消費社会の発展を推し進める道を開くものであったこととする¹⁶。ライデルはまた、アメリカの万博推進者たちが重視したのは「より良き未来を築く青写真として、科学と技術を近代的企業と密接に結びつけること」¹⁷であったとしているところから、科学・技術が将来の理想社会をもたらす鍵として万博の中に表現されていたとの認識を示しているといえる。ライデルがこの議論の中でキーワードとして用いているのは、「科学的理想主義」(scientific idealism)である。シカゴの「進歩の一世紀」博においては、「科学的理想主義の言葉」が会場の建築物を「強力な文化的メッセージで覆って」おり、ロボットや流線型のケーブルカーなどの展示は、「科学は現代人を救済するものであり、科学者・技術者は救世主とまでいかなくとも司祭であるというメッセージを強化」¹⁸するものであったとライデルは論じている。こうした思想表現は1939年のニューヨーク万博において完成され、「ユートピアそのものを実現する処方箋となった」¹⁹という。

このように概観してみると、二度のシカゴ万博の間の連続性は、一つには宗教的枠組みに基づくユートピア像の提示であったことが見てとれる。コロンブス記念博ではテクノロジカル・ユートピアニズムに分類し得る思想の萌芽が見られたものの、多くの来場者の想像力に訴えたのはキリスト教的なユートピアのイメージであった。科学・技術が理想社会をもたらす福音であるという思想が一種の宗教性を帯びて万博の場に表現され、科学者・技術者がその思想を司る聖職者としての立場から万博を組織し、民衆を教化するという構図は、「進歩の一世紀」博を含めた複数の20世紀前半の万博で確立されたものであるといえる。また、ギルバートが指摘した万博の商業化と娯楽化の傾向は20世紀の万博においてより一層進行し、ライデルによれば、19世紀の万博では意識されていた来場者への啓蒙・教育機能は影を潜めてしまったという²⁰。一方、コロンブス記念博が行なわれたヴィクトリア朝時代からの、「進歩の一世紀」博の離脱を示すものは、社会の世俗化と、文化・文明を表現する展示に対する各種産業展示の優位、大量消費社会の確立、そして科学・技術の一体化であった。19世紀中盤から第一次世界大戦以前までの万博の展示内容を詳細に検討したゴラン・アールストロムは、この時期の万博はいずれ

も第一回ロンドン万国博覧会（1851年）で提示された「産業文明の進歩を促進する」という目的から遠ざかることがなかった一方、産業技術の専門化により「総合的な展示」というものが次第に成り立ち難くなったと論じている。1900年のパリ万博を転機として、万博の産業展示は電気・自動車・印刷技術といった個別の産業に重きを置く方向へ変化していったというのである²¹。またライデルは、ヴィクトリア朝時代の科学者たちが万博の企画に参加しつつも商業・企業エリートとは一線を画していたのに対し、20世紀の科学者たちは企業の研究室所属であったり、大学所属でも企業の資金によって研究活動を行なっていたりしており、企業の商業活動と固く結びついた存在になっていたことを指摘している²²。こうして、19世紀においては建築や都市計画、社会倫理など、いわばアメリカ文明全体の進歩によって到達されるべきものとして想像された未来のユートピアは、1930年代には科学者・技術者によって支えられた各種産業が提供する商品やサービスを一般民衆が消費することで手に入るものとして想像されるようになったのである。

▶21 Göran Ahlström, *Technological Development and Industrial Exhibitions 1850-1914: Sweden in an International Perspective* (Lund, Sweden: Lund University Press, 1996), 17-18.

▶22 Rydell, *World of Fairs*, 215.

2 「進歩の一世紀」博における テクノロジカル・ユートピアニズム

それでは、「進歩の一世紀」博が描いたとされる産業技術によってもたらされる理想の未来像、テクノロジカル・ユートピアは具体的にはどのように表現されて来場者の眼前に現れたのであろうか。当時の資料に基づいて検討してみたい。

1933年にシカゴで開催を予定された万博の名称が「進歩の一世紀」に決定したのは1929年6月のことであった。万博の総責任者は富裕な石油業者のルーファス・C・ドーズで、ドーズと全米学術研究協会（National Research Council, NRC）所属の科学者・技術者との協議から、多くの集客が見込めるテーマとして、「科学の進歩」が採用されることになった²³。この「科学」というテーマをどのような切り口で扱うのかについては、「進歩の一世紀」博の公式ガイドブックが明快な説明を行なっている。以下は、万博のテーマについて解説した章の中で、「科学が発見し―産業が応用し―人間が順応する」（Science Finds—Industry Applies—Man Conforms）という小見出しが付けられた一節の抜粋である。

科学が発見をし、創造的才能のある者が発明をし、産業が応用をし、そして人間は新しい物に自らを順応させる、もしくはそれによって形成される。…人間が「新しい物」を使うことによって、彼を取り巻く環境が影響を受け、彼のものの考え方や生き方全体が変化する。個人、集団、人類全体が、徐々にあるいは速やかに動いていく科学と産業の進展と歩調を揃えて歩き出す²⁴。

▶23 Ibid., 93-94; Robert W. Rydell, John E. Findling, and Kimberly D. Pelle, *Fair America: World's Fairs in the United States* (Washington: Smithsonian Institution Press, 2000), 77-78; A Century of Progress Administration Building, *Official Guide Book of the Fair* (Chicago: Cuneo Press, 1933), 11-12. NRCは科学研究・産業・軍事の協力体制を促進する目的で1916年にウィルソン大統領が設立した組織である（Rydell, *World of Fairs*, 93.）。

▶24 *Official Guide Book of the Fair*, 11.

ここに見られるのは、科学・技術の発展によって生み出された「モノ」が人間そのもののあり方を変革していくという思想であり、しかもそれが望ましいこととして捉えられている。科学・技術の成果は単に人々に便利さや快適さをもたらすものではなく、人間の本質に作用することによって社会を変えていく力を持つものとして賞賛されているのである。この章では続けて、それまでの同様のイベントとこの万博がどのように異なるのかを解説している。過去の博覧会においては、「人間が挙げてきた成果が、一般の使用に供するための完成した製品によって例示され…賞の獲得を狙った製品や装置がずらりと陳列されていた」のに対し、1933年のシカゴ万博では「アメリカ人民が自らを理解するのを助けるとともに、この国を作り上げた力についてこれからの世代に向けて明らかにする」²⁵ことが目指された。この「力」とは、万博幹部によれば基礎科学であり、科学上の発見がどのようにしてなされ、それらの発見がどう実用につながっているのかという「過程」に重きを置いた展示を行うのがこの万博の基本的な方針とされた²⁶。各種産業が生み出した「モノ」の祭典であることに飽き足らず、それらの生産を支える原理に来場者の目を向けさせるという方針は教育的であると同時に、一般来場者の多くにとって基礎科学がなじみ薄く難解なものであることを考えれば、科学に対する人々の尊敬の念を高め、むしろその秘儀的性格（専門家にしか深く理解したり使いこなしたりすることができない）の印象を強める方向に働いたことが推測される。かつての宗教的信仰や倫理意識に代わり、科学がより理想に近い人間社会の形成を担う思想的基盤として来場者に提案されるということである。

この万博の中核的な展示会場であった科学館（Hall of Science）には、数学・物理・化学・生物学・地学・医学・歯学・薬理学のセクションが設けられ、それぞれのセクションでは視覚に訴えるモノや仕掛けを中心とした展示が行なわれていた。例えば数学では光電池を利用した計算機、物理では分子のモデル、医学では人間の体の仕組みが透けて見えるように作られた人体モデルといった具合である。同じ建物の中で、様々な科学の成果がどのように産業に役立っているかを示す展示がそこかしこに設けられていたので²⁷、来場者は、現代の生活の利便性は科学によって支えられているという理解に至るよう誘導される。「進歩の一世紀」博の教育的機能のこうした性格については、ライデルが次のような的確な評価を行なっている：「しかしながらその教育は、科学的というよりも政治的であり、哲学的というよりもイデオロギー的であった。それは科学的手法の神聖視と、社会問題に対して期待される科学的解決方法を称賛することをその中心に置いていた。」²⁸

「進歩の一世紀」博におけるこのような科学の位置づけは、「光」の演出によっても表現された。コロンブス記念博では白く塗られた建物群によって構成された中心会場「ホワイト・シティ」と、夜間にそれを煌々と照らし出していた電球の照明が光溢れるユートピアのイメージを作り出していたが、「進歩の一世紀」博ではさらに観衆を驚かせ、科学と技術が成し得ることを誇示するような光の使い方がされた。まず1933年5月27日の万博開幕時には、牛飼いの座の α 星、アークトゥルスから40光年を経て届く光をウィスコンシン州の天

▶25 Ibid.

▶26 Ibid., 12.

▶27 Ibid., 30-38.

▶28 Rydell, *World of Fairs*, 96.

文台で捉え、それを光電池で電気エネルギーに変換し、送電線でシカゴに送って万博会場の夜間照明の点灯スイッチを作動させるという演出が行なわれた。コロンブス記念博開幕時にアークトゥルスを出た光が、40年経って地球に到達したことを示す趣向である。これは好評であったので、期間中の毎夜行なわれた²⁹。また、当時は新しかったネオン管による照明がパヴィリオン群のライトアップにふんだんに使われただけでなく、同種の照明装置の製作過程を来場者に見せる展示が電気館で行なわれていた³⁰。科学の力によって、想像を絶する彼方から届くわずかな光を人間が制御してエネルギー化したり、自由に色調の調節が可能な光を人工的に作り出したりできることを目の当たりにした来場者は、科学の神秘性と同時にその有用性についても印象づけられたであろう。

これらの展示や企画を紹介した公式ガイドブックは、現代の科学・技術が可能にした生活のあり方と過去の生活とをたびたび比較し、かつての「不便」で「不潔」な生活からいかに現代の生活が進歩したかを強調している。そして、「科学は前進し続ける。未来がどんなものを生み出すかについてのヒントがここにある」³¹といった表現で、科学の力によって完全無欠な未来社会が到来するという期待をかき立てているのである。

3 「進歩の一世紀」博における各国の展示

このようなテクノロジカル・ユートピアニズムの表現が跋扈する博覧会会場において、諸外国による参加はどのような状況だったのであろうか。20世紀に入ってからアメリカ国内で行なわれた他の万博と比べると、1904年のセントルイス万博には60ヶ国、1915年のサンフランシスコ万博には32ヶ国が参加したのに対し、1933年のシカゴ万博への参加は21ヶ国にとどまっている³²。各国政府が建設したパヴィリオンの数ではさらに差が大きく、セントルイスでは19館、サンフランシスコでは21館を数えたのに対し、シカゴではわずかに6館であった³³。この参加国数や政府館数の少なさは、1929年のニューヨーク株式市場大暴落から始まった世界恐慌の下にあって、経済的余裕がない国が多かったためとされる。シカゴ万博にパヴィリオンを建設して参加したのは、イタリア・スペイン・スウェーデン・チェコスロヴァキア・エジプト、そして日本であった³⁴。他の国々の参加は、各種テーマ館への展示物（名産品、芸術品、工業製品など）の出品や、科学館への展示資料の提供といった形をとった。

これら諸外国の展示内容には、従来の万博で見られたような文化的特質を強調する展示や企画、貿易振興を狙った商品の展示といったパターンの他に、この万博のテーマに沿って、自国における科学分野の発展に関する展示を行なうパターンが見られた。前者のパターンの典型としては日本の展示がある。公式ガイドブックに紹介されている日本館の内容は、日本から大工を派遣し

▶29 *Official Guide Book of the Fair*, 20; Cheryl R. Ganz, *The 1933 Chicago World's Fair: A Century of Progress* (Urbana: University of Illinois Press, 2008), 67. なお、現在では地球からアークトゥルスまでの距離は約36.7光年と見積もられている。

▶30 *Official Guide Book of the Fair*, 29.

▶31 Ibid.

▶32 博覧会国際事務局 (Bureau International des Expositions ; BIE) 公式ウェブサイトより (<http://www.bie-paris.org/>)。アクセス日：2009年9月12日。

▶33 吉見俊哉『博覧会の政治学：まなざしの近代』（東京：中央公論新社、1992年）、19頁。

▶34 *Official Guide Book of the Fair*, 92-96.

▶35 Ibid.

▶36 Ibid., 40.

▶37 能登路雅子『ディズニーランド
という聖地』（東京：岩波書店、
1990年）、180頁。

▶38 吉見俊哉『博覧会の政治学』、
207-211頁。

て建設した建物に陶器・漆器・絹製品などを展示し、芸者が茶の湯のサービスを行なうという、コロンブス記念博の時と似通ったものであった。中国・モロッコ・エジプトなどの展示も、手工芸品や民族衣装を多用し、エキゾティシズムを前面に押し出していた点で共通している。一方、伝統文化のイメージに頼るのではなく、モダンデザインの建物・インテリア・工業製品等を出品した国々も少数ながらあった。イタリアとスウェーデンがこれにあたる³⁵。

西欧を中心としたヨーロッパ諸国とカナダは、自国の研究機関や研究者の挙げてきた成果を科学館で展示した。フランスはパスツール研究所、ドイツはコッホ研究所が、それぞれの研究所がその名を冠している研究者が医学にどのように貢献したかについての展示を行なった。同様の展示を、イギリス・イタリア・オーストリア・オランダ・カナダも行なっている³⁶。

万博の「科学」というテーマに関連した展示を行なった国々とそうしなかった（可能であったにしろ、なかったにしろ）国々がこのように分かれたことは、万博来場者がそれぞれの国や地域についての印象を形作る上で少なからぬ影響を及ぼしたと推測される。一方には、科学というフィールドにプレイヤーとして参加できる国々があり、他方にはそこに参加できない国々がある。科学が現代の産業社会を成立させそれを駆動する原理であるならば、世界を「進歩」させることができるのは前者のグループに入る国々だけであり、その他の国々はいわば時間の止まった場所として、想像力の遊び場や観光の対象となる他はない。

「科学」の力によって「進歩」を続ける現代世界の一部として表象されることのなかった国や地域がエキゾティシズムの対象となることには、情報の受け取り手であるアメリカ社会側と、そのような情報を提供する側との共謀が働いている。能登路雅子はディズニーランド（1955年開園）における異文化世界の扱われ方について、アフリカや太平洋の島々、アジアなどが白人の冒険の舞台として表現されていることを指摘し、この発想が「アメリカ大衆の集団的想像力」³⁷によるものであると論じているが、こうした世界観がアメリカ社会で共有されるに至るまでには、人々が折に触れかつ長年にわたり、非西欧地域をエキゾティックな異世界とする表現にさらされていなければならず、万博はそうした機会の中でも最も影響力の大きなものの一つであったと考えて差し支えないであろう。そしてその表現の流通を支えたのは、アメリカ社会側の娯楽に対する需要だけではなく、そうした需要に積極的に応えることで経済的利益を確保しようとする日本のような国々の存在であった。日本が欧米諸国で開催される万博に参加するにあたり、明治以来一貫して欧米人のエキゾティシズムに訴える展示を企画してきた背景には、輸出の拡大という目的があったことを吉見俊哉が指摘している³⁸。

日本の例が示すように、万博への参加の形態や展示物には、参加国の対外イメージ作りや国際政治・経済における思惑が表れるものであるが、「進歩の一世紀」博において最も顕著なセルフ・プロモーションを行なったのはファシスト政権下のイタリアであった。先に触れたように、イタリアは独自のパヴィリオンの建設に加えて科学館への展示出品も行なっているが、万博期間中に何よりも世間の耳目を集めたイタリア関連の企画は、イタロ・バルボ将

軍率いる飛行機部隊のイタリアーシカゴ間飛行であった。1933年7月15日、24機の飛行機が万博会場そばのミシガン湖上に着水した際は、周辺は詰めかけた人々の歓声と歓迎の号砲が耳を圧するばかりであったという³⁹。飛行隊は熱狂的な歓迎を受け、会場近くの道路が「バルボ大通り」と改称されたほどであった。世界恐慌の影響で経済的に苦しい中であっても、ムッソリーニ政権は20世紀の花形技術に躍り出た航空術の発展にイタリアが寄与していることを示すことで、国威の発揚を狙ったのである。航空機のフォルムを象徴的に使ったデザインのパヴィリオンの中では、古代建築から航空機製作までを網羅した技術史展示に加え、モダンデザインの家具や日用品、観光客を引きつけるような伝統工芸品の紹介も行なわれており、イタリアの過去と現在の栄光が総合的にディスプレイされていた⁴⁰。

4 「進歩の一世紀」博と移民コミュニティ

「進歩の一世紀」博におけるこうした諸外国による企画・展示と、当時のシカゴの人口の多くを構成していた移民コミュニティがどのように関わっていたかについては、シェリル・R・ガンツが2008年に出版した論考の中である程度詳しく述べている。ガンツによれば、万博企画者側は博覧会の経済的成功を確かなものとするため、シカゴ市内の多数の移民集団に対して参加を促す働きかけを積極的に行なった。「民族委員会」(The Committee on Nationalities)が組織され、各移民コミュニティの指導的立場にある人々やエスニック団体、外国語新聞を万博の宣伝や関連企画に動員する努力がなされた⁴¹。こうした要請に各移民コミュニティが応えて実施された企画の中で代表的なものが、特定の民族・国民集団にスポットを当てるイベントの日の設定である。これは「ドイツの日」(German Day)「アイルランドの日」(Irish Day)といった日を決め、それぞれの移民コミュニティの主催でパレードやページェント、記念スピーチ、音楽演奏などを行なうもので、シカゴの構成人口の多様性を反映して37もの日程が設定された⁴²。

各移民コミュニティはこのイベントを、自集団がアメリカにいかに関与してきたかを公に宣伝する機会としたが、それに並行して独自の政治的主張を行なったグループも少なくなかった。例えば当時のユーゴスラヴィア王国出身の移民は第一次世界大戦開戦時の、オーストリア＝ハンガリー帝国海軍によるベオグラード砲撃から20年にあたる1934年7月29日(サラエヴォ事件の翌日)を「ユーゴスラヴィアの日」として選択したことを、当日のためのプログラム冊子の冒頭で述べている。同じ冊子の中には、前回の万博にはオーストリア＝ハンガリー帝国の出身者として参加していたことや、ユーゴスラヴィアを構成する民族独自のアメリカとの関わりや歴史など、民族的誇りを強調する内容が含まれている⁴³。同様に、「リトアニアの日」のプログラムの前文は、「暗く陰鬱な、400年間の失われた自由の年月」を経て努力の末に独

▶39 Ganz, *The 1933 Chicago World's Fair*, 133-34.当時の映像を以下のビデオで見ることができる。WTTW Network Chicago, *Chicago Stories: Riverview & 1933 World's Fair* (Window to the World Communications, Inc., 2000).

▶40 Ganz, *The 1933 Chicago World's Fair*, 135; *Official Guide Book of the Fair*, 92.

▶41 Ganz, *The 1933 Chicago World's Fair*, 124-26.

▶42 Ibid., 127-28.しかし、万博企画者側が声をかけたのはヨーロッパ系のエスニック集団に限られ、アフリカ系アメリカ人やメキシコ人のグループはほとんど無視されていた。

▶43 Yugoslav World's Fair Committee, *Official Yugoslav Day Program at a Century of Progress* (Chicago, 1934), 2, 4-6, 3-15.

▶44 Lithuanian Day Committee, Lithuanian Day Program at a Century of Progress (Chicago, 1934), 2.

▶45 Ganz, *The 1933 Chicago World's Fair*, 135-36.

▶46 Ibid., 140-48.

▶47 *Some Famous Swedes* (n. p., 1933), 15-19; 28-31. グスタフ・ダレーンはエンジニアで、受賞理由は「灯台や灯浮標などの照明のためのガス貯蔵器とともに使用する自動調節機の発明」(for his invention of automatic regulators for use in conjunction with gas accumulators for illuminating light-houses and buoys)であった。ノーベル財団公式ウェブサイトより (http://nobelprize.org/nobel_prizes/physics/laureates/1912/index.html)。アクセス日：2009年9月21日。

▶48 *World's Fair Memorial of the Czechoslovak Group* (Chicago, 1933), 18-21.

立を果たしたと述べているなど⁴⁴、第一次世界大戦の結果として独立を達成した国々からの移民たちが民族としての可視性を高める活動をしていることがうかがえる。

移民コミュニティとしての政治的立場の有無や方向性は、本国からの万博参加に対する態度の違いとなっても現れた。先に紹介したイタリアの例でいえば、市を挙げてのバルボ隊の歓迎にシカゴのイタリア移民コミュニティも加わっていたが、移民たちの間では、ファシズムそのものへの関心は極めて薄かったとされる。イタリア移民コミュニティにとっては、万博でイタリアの文化が注目され、それを誇りと感じられることこそが重要で、祖国における政治的動向については疎い人々が大半であったという⁴⁵。一方、同様に航空術の進歩を披露したドイツに対しては、シカゴのドイツ移民コミュニティは分裂した態度を示した。ナチ党支配下のドイツ政府はツェッペリン飛行船をシカゴに派遣したが、移民コミュニティ内は親ナチ派と反ナチ派に分かれていたため、この機会をナチ党の宣伝に利用しようとする前者のグループと、ドイツの文化的小および技術的達成の証とみる後者のグループとが鋭く対立することになった⁴⁶。

このように各移民コミュニティは、この万博の機会をそれぞれの事情に合わせて利用しようとしていたが、他方で科学・技術と進歩という万博のテーマに目を配ることも忘れてはいなかった。航空術という新時代のテクノロジーを前面に押し立てて国際的な威光を高めようとしたイタリア・ドイツと、それを盛り上げる役に回った両国の移民たちだけではなく、他の移民コミュニティも、科学・技術分野へ自集団がどのように寄与してきたか、また科学的思考を信奉する時代の趨勢にどれだけ合致した活動を行なっているかを可能な限り主張しようとした。スウェーデン移民のコミュニティは万博に合わせて、スウェーデン出身のいわゆる偉人の業績を紹介する小冊子を発行し、科学者と発明家・技術者の項目にはそれぞれ多くの名前が連ねられた。科学者の項目にはよく知られた18世紀の博物学者リンネ (1707-1778) を始め、元素記号の原案を創案した化学者ベルセリウス (1779-1848) や、当時探検家として名を馳せていた地理学者ヘディン (1865-1952) など、時代も専門も幅広い領域の人々が掲載された。発明家・技術者の項目で最も多くの行数を割いて説明されているのは南北戦争において北軍に新型の軍艦を提供したエリクソン (1803-1889) で、アメリカのスウェーデン系の人々にとってのこの人物の重要性がうかがえる。他にはダイナマイトを発明したノーベル (1833-1896)、その遺言によって創設されたノーベル賞を物理学分野で受賞したダレーン (1869-1937) などについての記事が収録されている⁴⁷。当時のチェコスロヴァキア共和国出身の移民コミュニティが発行した万博記念冊子の中では、「チェコスロヴァキアのエンジニアと産業、その進歩への貢献」と題した章が設けられ、各種産業の紹介に続き、科学的管理法の研究や科学者・技術者の専門職団体の発達ぶりなど、当時先端的と考えられた活動が行なわれていることが紹介されている⁴⁸。またドイツ移民の親睦団体が発行した年報の万博記念号では、「産業と科学におけるドイツの要素」と題した長いエッセイで、ドイツ系アメリカ人の歴史学者が、合衆国独立以前の時代からドイ

ツ移民がアメリカに技術的貢献を行なってきたことを述べている。もっぱら様々なモノ作りの分野での貢献が紹介される中で、少ないが天文学・科学教育・医学などの分野で活躍したドイツ系の人々の名前も挙げられている⁴⁹。当然のことながら、すべての民族・移民集団が科学・技術の分野で顕著な功績を挙げた人物を輩出しているわけではなく、それぞれの本国で科学・技術の発展が均一に進んでいるわけでもなかったが、自集団が時代に取り遅れているのではないことを何らかの形で示さなければならないという競争意識が、多くの移民コミュニティの間で働いていたと考えられるのである。

▶49 The German Club of Chicago, *Year Book of the German Club of Chicago* (Chicago, 1933), 31-36.

5 おわりに

「進歩の一世紀」博はその企画者や参加者たちが、立場によって様々な異なる目的を果たそうとして動いた場であった。責任者のドーズを始めとする財界の人々は、この万博に大勢の来場者を集めて経済的に成功させることを至上命題としていた。科学の進歩というテーマの設定もシカゴ市内のエスニック集団への働きかけも、その目的の達成のために行なわれたことであった。海外からの参加国は、貿易品の見本市という万博の伝統的な機能を利用して経済的効果を狙ったり、国際社会の中での存在感の発揮や地位の向上を求めたりするなど、それぞれの国が重要視する目的に応じた参加形態をとった。そして当時のシカゴの人口の六割あまりにものぼった移民一世・二世から成る各民族集団は、互いの競争を意識しつつ、本国の万博参加に協力したり、文化的企画を打ち出して自集団の美点やアメリカの発展への貢献ぶりを披露したりした。

このような多様なアジェンダが交錯する中で、その要ともいえる位置を占めていたのがテクノロジー礼賛のイデオロギーであった。大恐慌の下にあって、この万博が延べ3900万人あまり⁵⁰の来場者を引きつけ経済的利益を出すことに成功したのは、万博会場が体現していた楽観的な未来イメージが、人々の心に強く訴えたからに他ならない。「ホワイト・シティ」とはうって変わって鮮やかな色彩を多用した建物群、アークトゥルスから放出される光を図案化した公式ロゴマーク、空中ケーブルカー、最新のシステムキッチンや空調システムを備えたモデルハウス群「未来の家」、何マイルも離れた場所からも見えたという大規模な夜間照明―これらすべてが、厳しい社会経済情勢に倦んだ人々に一時の避難場所を提供する役割を果たしたのである。万博会場が垣間見せてくれた未来のユートピアを可能にするもの、それこそがテクノロジーであり、その発展を支える原理が科学であった。

では、その未来のユートピアを建設し、享受するのは誰であろうか。「進歩の一世紀」博が提示していた答えは、アメリカを中心とする西欧世界の人々こそがユートピア建設の主役であるということである。科学・技術の進歩に顕著な貢献を行なった実績があり、またこれからも行なえると考えられたア

▶50 これは、この時点までの万国博覧会で最も多い入場者数であったという。Ganz, *The 1933 Chicago World's Fair*, 4.

メリカと西欧諸国に加えて、貢献度では辺縁に位置するヨーロッパの他の国々までは、来場者やヨーロッパ系の移民コミュニティの人々（両者は多くの場合、重なっていた）が想像した未来世界の地図の中に含まれていたことであろう。しかし、科学・技術の進歩ではなく、エキゾティシズムに訴える展示や企画でしか表象されることのなかった国や地域は、こうした未来像からは一線を引かれた存在となり、いわば時間の進むことのない場所としてアメリカ大衆の意識の中に取り残されたのである。ここに一つのパラドックスが見て取れる。「万国」の博覧会（World's Fair）と銘打ちながら、テクノロジーのユートピアという志向に貫かれた「進歩の一世紀」博で起こっていたことは、実は世界を単純に二元化し、「進歩」の側にある国／人々と、ない国／人々とに分けてしまうことではなかったであろうか。

今後の課題としては、テクノロジカル・ユートピアニズムを始めとするテクノロジー観が、アメリカと他の国々とはどのように共通し、また異なっているのかを検証することが挙げられるだろう。イタリアやドイツが誇ってみせた航空技術は、単に民族的・文化的優秀性のシンボルとして利用されたのか、それとも理想的な未来社会の建設につながるものとして意識されていたのか。また、テクノロジーへの信奉の質や浸透状況が、イギリスやフランスといった科学・技術分野で大きな成果を挙げてきた西欧諸国とアメリカとは異なるとしたら、その相違をもたらしているものは何なのか。かつて「進歩」の側にないとされた、日本を含む非ヨーロッパの国々も、その後の時代においては科学・技術の分野に少なからず参入してきたが、これらの国々を動機づけている要素の中に果たしてテクノロジカル・ユートピアニズムに類する発想があるのかどうか。これらのことが明らかになった時、アメリカの特質と、近・現代世界により普遍的にみられる特質とが峻別され、これからの時代におけるテクノロジーのあり方についても示唆を得ることができであろう。

付記

本稿は、平成20年度科学研究費補助金（基盤研究B）「18世紀末から20世紀前半までの英米のユートピアニズムの政治批評的研究」（課題番号17320044）に研究分担者として参加した成果の一部である。

